

ランクアップのための論文講座－研修成果を文字で表わす－ 2015/7/14 大谷 康晴

1. 認定司書と著作

- 認定司書のための要件：1)司書資格取得後通算 10 年の実務経験， 2)一定の自己研鑽， 3)著作
- 要件の中でもっとも問題になっているのが著作（別紙参照）
- 著作の何が問題？
 1. エッセイになってしまう→「論文」としての文章が書けない
 2. 自館の事例紹介の範囲にとどまる→図書館経営に資する→図書館界全体に通用する内容にならない

2. 論文とは何か

- 論文と批評文の違い（参考：佐々木健一(美学.東京大学名誉教授)「論文ゼミナル」(東京大学出版会)
 - 批評文
 - ◇ 一人称的な文章であること
 - ◇ 価値評価を下そうとしていること
 - ◇ 「わたしの考えは～である」という性格
- 論文は批評文の対極
 - 論文の特徴
 - ◇ 一人称的な要素を排除する
 - ◇ 価値評価を差し控える
 - ◇ 感情的な発言をしない
- 論文は自分の意見を書くはず？：論文は，“冷静に事実を指摘して，対象の特質を浮かび上がらせる”姿勢
- 論文のテーマ
 - 実務経験や業務知識にもとづいて，実践的な課題で OK
 - その課題に対するあなたの考えを持つ
 - 情緒に訴えるのではなく，事実や妥当な推論で指摘していく
- 論文の盛り込む事実や推論の用意
 - 他の文献を参照していく：図書館界の雑誌，カレントアウェアネスや各種 ML，ニュース……ニュースアラート
 - 客観的なデータ：業務統計，業務記録
- 妥当な推論
 - 客観的である
 - 飛躍のない議論の展開
- 議論の手法の一例（河野哲也(哲学，導入教育.立教大学)「レポート・論文の書き方入門 第3版」(慶應義塾大学出版会))
 1. 反論－否定的結論
 2. 反論－代案の提示
 3. 主張の限定－補足・代案の提示
 4. 批判的検討－肯定
- 自館の事例紹介で終わらないために

- 一人称的な要素を排除するのが論文→個別的・再現性のない話はしにくいはず
- 事実に基づく論理の展開→他の図書館にも共通する要素があるはず
- 自館だけの特殊性, 他館に共通する普遍性に触れて補足

3. 論文と意見

- 意見と事実の混同が生じる時
 - 自分の考えを述べようとする→そんなに大したものにならない
 - 先行する文献の意見と同一の意見
- 自分の考えが大したことが無い!!
 - 「巨人の肩の上に立つ」: 現代の学問は多くの研究の蓄積の上に成り立つ
 - 「自分の考え」は大した分量ではない
 - 先人の成果を紹介すること, 先人の成果をもとに論理を展開していくことは恥ずかしいことではない
 - ただし, 先人の成果の部分と自分の意見を区別しないこと, これは犯罪
- 先行する文献と意見が同じになってしまう
 - 論理の展開の「批判的検討－肯定」のパターン
 - ◇ 全く同一になるにしても, あり得る反論をぶつけているのか
 - ◇ 先行する文献とは時代・状況が異なる
 - ◇ この作業を怠っていると盲従しやすい
 - 面倒がらずに事実を集める
 - ◇ 改めて読んでみる> たとえば「市民の図書館」
 - ◇ 裏をとる> 賛同する意見と反対の意見を読んでみる
 - 何の問題もなく, 先人の意見とまったく同じはそうはない
- 「意見を述べる=とうとうと述べる」という誤解
 - 論文においては, 事実を集めて, 論理を展開し, 展開に基づく結論を述べればそれで十分
 - 小論文のような「ストーリー」は不要
 - むしろ, 意見を述べるためには事実が必要
 - 事実を事実として書いていく

4. 終わりに

- エッセイと他人に受け止められやすい文章
 - 事実によらない
 - 情緒的な「ストーリー」
 - 説明責任を果たす文章は, 論文的文章
- うまい「ストーリー」は誰にでも書けるものではない
- 論文の手続きを実行することは, 誰にでもできる
- 事実を集める／読むことは面倒
 - 「下ごしらえ」をきちんとすることで, 自分の中の意見が豊かなものになっていく